

---

# 無限問題

城宮 美玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限問題

### 【Nコード】

N6343X

### 【作者名】

城宮 美玲

### 【あらすじ】

あたしの好きな人は、双子だ。その片方をあたしは好き。そして親友もいる極々普通の高校生。のはずなんです、あたしの通っている学校。少し変わっているのです。

さまざまな事件・問題が起きながらも徐々に恋も進んで行く……  
スローテンポな奇想天外ラブコメディ！。

## 第一話 あたしと親友と双子と

突然ですが、すばり！あたしの好きな人は、双子です。

だからって二人共好きな訳ではないですよ？って言うか 見た目は別として、性格が二人共違うのです。

まず双子・兄の季野きよのしゅう 秋は、クールでいかにも出来る奴って感じですが若干ヘタレ気味 そして眼鏡を掛けています。でも短気で怒りっぽくて しかも淡々と怒るので迫力倍増です ううっ思い出しただけで 。そして、なんとなくですが秋は、あたしの親友が好きなのではないかと思えます よく見つめてるし 。なんだかんだで、あたしが好きなのは、この秋なんだけどね 。 。制服は、ネクタイもちゃんと締めてワイシャツの第一ボタンまで締めてブレザーの前も締めて 真面目な優等生。制服をちゃんと着るだけで優等生になれるなら、あたしも着るんだけどなー。

次は、双子・弟の季野きよのしゅう 夏騎は、いつでも笑顔で誰にでも優しくマイペース！心が広いので怒る事は、あまりありません。仕草が紳士と言うか レディーファーストが分かっていると云うか 。でも時々悲しそうな顔をするのは何故だろう？そして秋とは逆に冷静なのですが 頭の方があまり良くないので 補習仲間でもあります。制服のネクタイは付けては、いるのですが緩めていてワイシャツの第一ボタンとブレザーの前も締めていないのです。親しみやすいから良いとあたしは、思う。

そしてあたし、節中せつなか 春香はるかは、明るく活発！勉強は苦手だけど運動・スポーツなら負け知らずで補習の先生にはお世話になってます。そして秋が好き！もう四六時中見ていたいくらいLOVE、これには

親友も呆れる程。制服のリボンは付けてワイシャツの第一ボタンは外し、セーターを冬には着ます！スカートは、もちろんミニですよ。フフフ。よく変わっていると言われるあたしですが、このあたし達が通っている学校自体が少し変わってます。

おっと！忘れる所だった。あたしの親友を紹介しないと！

あたしの親友、松永冬音まつながふゆねは、常に冷静沈着でクールな毒舌。憧れる女子も少なくない。まさに異性より同性にモテるタイプ？そして他人の恋愛事情すこひに頗る詳しい。なんでそんな事まで！？と言うような情報まで。一番敵に回してはいけない人だと感じている。男子より男前です。まあ、そんな冬音と何であたしみたいなのが仲いいのかって聞かれると、何でだろう？ってなるんだけどね。制服は、リボンじゃなくてネクタイでセーター（灰色）は、指先が少し出る位の大きさ。スカートは膝よりやや上？ミニまでは行かない感じですよ。

「あれ？どうしたの？」

噂をすればで、冬音が首を傾げながらあたしに向かって歩いて来る。あたしは、冬音に顔だけ向けた。

「別にどうもしないよ？」

「いや、周りがゴキ　で騒いでるのにあんただけ上の空だから」

「ゴキ　ごときで騒がないよ」

溜め息を吐いた後、冬音は呆れたように言った。

「聞いてなかったんだ。サイエンス部の部員が誤って近くにいたゴキに危険な実験前の薬品をかけちゃったんだよ」

「それでゴキ は？」

「かなりの大きさになって校内を駆け巡っております」

「それかなりの大事おおいだよ。冬音が冷静だからそうでもないと思ったら大事だよ」

そう言った直後に秋が急ぎ足であたし達の方へ駆けてきた。

「春香、無事か？」

「あっうん！」

「なんで春香だけなの？私も居るのに」

横から冬音がジロリと秋を睨んだ。秋は、眼鏡の縁を指で押す。

「いや、見た目無事だから」

「それ言ったら春香も無事でしょうが」

「春香は、か弱いんだ！松永と一緒にするな」

「お前は春香の保護者か」

腕を組んで冬音は、壁にもたれ掛かった。そして少し俯く。

「これからどうするんだろっ?」

「サイエンス部が元に戻す薬品を開発中らしい。出来るまで辛抱するしかないな」

今更ですが、こんな事件は日常茶飯事です。主にサイエンス部と何らかの事がキツカケで起こります。

「そう言えば、季野君は?」

「夏騎の事か?それなら、さっき購買にパンを買いに行ったぞ」

「どこまでもマイペースな」

冬音は、いつもの事なので諦めているのか溜め息を吐いただけで後は何も言わなかった。

本日二回目の噂をすれば、夏騎がパンを持ちながらこちらに歩いてきた。秋以外歩いて来るな　あたしの所に。

「三人、固まってどうかした?」

「騒ぎについて話してたんだ。ゴキ　が校内にいるって言うのによく食えるな?」

「腹が減ってはなんとやら　だからね」

そう言っつて夏騎は、パンを食べ始める。そして秋も夏騎からパンを受け取り食べる。ハア　　かっこいいなー。イケメンは、何をして

も絵になるよ。

「何、うっとり見てんの？」

あたしにしか聞こえない声で冬音が言う。慌ててあたしは顔を逸らした。

「み 見てないもん」

「秋を見てたでしょ」

なんで分かるんだろう 夏騎と秋は隣合わせだからどっちを見てるかなんて分からないはず…。

「まあ、どっち見てもいいけどね？私は」

そう言うってから冬音は、夏騎と秋に近づいて行った。あたしは、冬音の後ろから付いていく。

「二人だけずるいなーパン」

「ごめん、二つしか無くて」

夏騎は、申し訳なさそうに苦笑した。すると、横から秋が言った。

「それなら、少し分けてやるよ」

「上から目線ムカツクな！でも分けてほしい」

突っかかりつつも冬音は、パンがほしいらしい。そんな冬音に対し

て秋が溜め息を吐いた。

「誰が松永に分けると言った？これは、春香に分けるんだ」

「ええっ！あたし？」

「えこひいきだ！えこひいきー」

納得がいかないようで冬音が不機嫌になる。あたしは、冬音をなだめてから秋の差し出すパンを見た。思わず唾を飲む。

だってこれって……間接キスと言う奴ではないですか！

「顔が赤いけど大丈夫か？」

「だっ大丈夫！あたし……あんまりお腹空いてないから秋が食べて良いよ？」

今のあたしに間接キスは、無理でした……せつかくのチャンスを一……！と後で後悔する。

「春香がいらなら私が！」

「お前にやるパンはない……と言うか本当じゃない。俺が食べたからな」

「とことん嫌味だ……」

秋は勝ち誇った笑みでパンの入っていた袋を冬音に見せ付けた。さっきの今でもう食べたんだ……と言うか今の秋かつこ悪っ。



「季野くんは、くれるよね？」

冬音が半泣きだ…そんなに食べたかったんだ…パンを。ただのパンだよ？冬音って食べ物に関してだけは、変な執着を持ってるんだよね。

「可哀想だから全部あげるよ」

「わーい！フツ……双子なのにこんなに優しさに違いがあるなんてねー？」

パンを得たと同時に冬音の弱気は、なくなった。すごいなパンっ！

《……サイエンス部が元に戻る薬品を完成させ、出来事は解決しました。まだ小さくなったゴキ　がいるかもしれないので見つけた方は後を宜しくお願いします》

「解決したんだねー？」

「まだいるかもしれないんだって。春香、足元には気をつけなよ？」

「冬音、心配しなくて大丈夫だよ！あたしがそんなへま、する訳」

グシャ……

あたしの足元から嫌の音がした……。足を上げて見るのは……かなり怖い……。

「イヤーーーーー！」

「落ち着けっまず救急車をだな……」

「季野君が落ち着け……」

後日、上靴を買い換えたのは、言つまでもない事でしょう。

続くのでした。

## 第二話 勉強とパンと約束と…

「NOー!!」

頭を抱えてあたしは、叫んだ。耳を抑えて、顔をしかめながら冬音は、言った。

「いきなり何？」

「もうすぐテストだよね？」

「焦ってるんだ？勉強真面目にやってないから」

冬音は、余裕綽々であたしを哀れそうに見た。

「だってー」

あたしは、涙目になりつつある。

教室のドアを開けて、秋が近くに来た。

「松永、また春香を泣かせてるのか？」

「私がいつ春香を泣かせたって？春香を泣かせてるのはテストだよ！テ・ス・ト！！」

今すぐにもバトルが勃発しそうな雰囲気。冬音と秋は、お互いを睨みつける。

そこへ、夏騎がまたパンを持ってやってきた。

「また喧嘩？」

「私、春香を泣かせてないよね！」

「え？どちらかと言えば泣かせているのは、勉強とテストじゃないかな」

「ほらー」

勝ち誇ったように笑いながら冬音は、腰に手を当てて胸を張った。

「無い胸、張って…」

呆れたように秋が言う。

これは、また喧嘩が始まりそう…。

「うっさいなー！胸だけが全てじゃない！」

「ない奴が言いそうなセリフだな」

ああっ！なんで二人共、喧嘩するのかな？秋を睨む冬音の肩を夏騎が叩く。

「パン、いる？」

「え……いいの？」

冬音が目を輝かせて夏騎を見た。冬音は、パン本当に好きだなー！

この雰囲気でパンは、どうかと思ったけど…夏騎ナイス！！

あたしは、夏騎に向かって親指を出した。夏騎は、それに気づいたようであたしに微笑んだ。

うわー顔同じだから思わずときめいちゃったよ……。眼鏡なかったら、どっちがどっちかあたし分からないかも。

「話は、戻るけど本当にテスト大変だと思っただよね。今の春香では」

「俺も今の夏騎ではテストが大変だと思う」

「珍しく意見が合った……。じゃあ今日、早速勉強会しない？」

やっぱりこの展開か……。薄々こうなるんじゃないかって思ってただ……。ど……。

あたしは、夏騎を見た。夏騎もこうなると思っていたのか特に驚いていなかった。それともポーカーフェイスなだけ？

「でも誰の家でやるんだ？勉強会」

あたし達の意見まだ言っていないのに話が進んでいる……。まあ、嫌だって言うに決まってるというか嫌って言うから当然と言えば当然なんだけどね……。

「私の家は、事情があってダメなんだよね。春香の家は私が許可し

ない！男を春香の部屋に入れるなんてとんでもない事だよ」

「松永は春香の父親か……って事は消去方で俺達の家になるな」

「秋たちの家かー！見てみたいかも……楽しみだなー」

「それ位勉強も楽しめたらね……」

溜め息を吐いて冬音が呟いた。そしてその隣で秋も溜め息を吐いて言った。

「夏騎も楽しんでくれればいいんだけどな……」

なんか後半、冬音と秋の意見が一致している……仲いい事は、いいんだけど……。

ちよつとヤキモチを焼いてしまう。試しにあたしは、聞いてみた。

「じゃあ二人は、勉強楽しい？」

「俺は楽しい。色々知る事が出来るからな」

「え？私は、全然楽しくないけど」

冬音から意外な言葉が出た。秋は、目を見開いている。

「じゃあなんで成績上位なんだよ」

「知らないよ……でも楽しめば上がるんじゃない？」

「じゃあ春香が楽しんで勉強やったとして、学力が上がるか？」

三人は、あたしに注目した。

「……………上がるよ？」

「間！その間が一番傷つく！そして何故、疑問系！」

「だってハツキリ言ってる春香の学力が上がるなんて皆無だから」

「随分ハツキリと……………」

とにかく、あたしは勉強会に行かないといけないようです。多分どんなに嫌がっても強制的に連れて行かれる。

でも秋と夏騎の家に行けるんだー！でも勉強会とはいえ……………いきなり家は、ハードではないでしょうか？

### 第三話 虫と騒ぎと餡蜜と…

昼休みのチャイムが鳴り、あたしは冬音の席へと歩いて行った。

「食堂行こう！」

「えー…餡蜜付ける？」

「付ける」

「じゃあ行く」

そう言つて冬音は、すぐに立ち上がった。即答ですか…ちゃっかりしてるな！。

食べ物に釣られるんだよね…知らない人でも食べ物もらつたらついで行っちゃいそう…。

「食べ物もらつても知らない人について行ったらダメだよ！」

「何を突然…私は小学生か…」

「そつだ！秋達も誘わない？あつても今日、お弁当かな？」

あたしは、秋達の居る教室を覗いてみた。

「居る？」

隣から冬音も教室を覗く。



「居ないみたいだね」

「どこに行っただらろう？」

「さあ？居ないんじゃない…」

冬音は、セーターのポケットに手を入れて廊下を歩いて行く。

「ちよつと冷たいんじゃないの？」

「餡蜜が先」

冬音に続いてあたしも、ついて歩く。

「双子か餡蜜だったらあたしは、双子を取る！」

「そんな自信たっぷりと言われても…」と言っか春香の場合…」

「双子じゃなくて秋を取る！」

「だと思った…」

食堂に着き、食事を終えて冬音が餡蜜を食べようとした瞬間、校内放送が聞こえてきた。

《只今、学校内の昆虫観察で使う予定だった昆虫が入っているケージをサイエンス部の部員が誤って壊してしまい、校内に昆虫が逃げ出しました。甘い物をお持ちの生徒は、ご注意ください》

「またサイエンス部だって…」

「サイエンス部以外が問題を起こした事なんてあった？」

「ないね…」

逃げ出した昆虫、どうするんだろう？もちろん捕まえて戻すんだろうけど…。

でも、どうやって捕まえるんだか…。

「あ…季野くん達だ」

「え？」

食堂の出入り口の方で、秋達が何かしていた。

近づいて声をかけてみる。

「何してるの？」

「さっき昆虫が逃げ出したさ？だから罠を設置してるんだ」

「偶然近くにいたのが僕らだったから手伝わされて…」

「お前は、すぐにサボってたがな…」

秋達の仕掛けた罠に、少し経ってから昆虫達が集まって来た。

「あれ？」

昆虫の数を数えながら、秋が首を傾げる。あたしは、畏に引つかかっている昆虫達を見た。

「どうしたの？」

「三匹足りない……」

「どこ行っただらう？」

そう言ってから、あたしは周りを見回した。周りにいるとは決まっていなくても、なんとなく見回してしまう。

「三匹くらい、その内出てくるでしょ？踏んでなかったら」

「確かにその通りだけど、なんて事言うの……」

「私は、餡蜜食べてくる」

冬音の言葉を聞いて、秋が顔を上げた。

「餡蜜？……止めておいた方がいいんじゃないか？」

秋は、目を逸らして眼鏡の縁を指で押しながら、そう言った。冬音は、不満そうに顔をしかめる。

「嫌、私は食べるよ」

そう言って冬音は、食堂に入っていく……少ししてすぐに戻って来

た。

「どうしたの？餡蜜は？」

冬音は、力なく首を横に振った。

「食べられない……」

「どうし……！？」

あたしの前に冬音が差し出した餡蜜を見て、どうしてなのかすぐに分かった。

餡蜜に三匹の昆虫が……。

「もしかして、残りの……？」

「ああ、餡蜜と聞いてなんとなく予感は、していたが……」

そう言っただけは餡蜜に付いている昆虫三匹を取り、ケージに入れた。そして餡蜜は、もちろん食べられないので……。

「私は一体今日のデザート、何を食べればいいのか？」

「今日くらい、我慢しろよ……」

呆れながら秋が言った。フラフラと冬音があたしの所に歩いてきて両肩を掴んできた。

「うっー、春香ー」

涙目だし、もう冬音半泣き状態……。あたしが困っていると、夏騎が冬音の肩を叩いた。

冬音は、振り返る。

「実は、チヨコが余ってるんだけどいる？」

「是非ください！」

両手を出して冬音は、夏騎に言った。夏騎は何処からかチヨコを出して冬音に渡した。

「デザート之恩人！今度何かお礼します」

「楽しみにしてるよ」

「大袈裟な……」

あたしと秋は、冬音のデザートに対しての執着に呆れて思わず溜め息を吐いてしまうのだった。

後日、授業のその昆虫を観察する事になり……。

「あたし達のクラスで使う昆虫だったんだ……驚いたね？冬音……？」

「先生ー松永さんが倒れましたー」

餡蜜台無しにされちゃったんだっけ……。あたしは、また溜め息を吐いた。

続く……？

#### 第四話 勉強会と部屋と教科書と…（前編）

只今、放課後。冬音は、体力切れで机に伏せている。

え？勉強会は、第二話の日にやったんじゃないかって？

あの日は、冬音の都合が悪くて無しになったのです。

まあ、第二話とか言ってる時点で、あたしは変なんだと思っけどさ？

「行くんだったけ？今日、季野君達の家」

「うん…だってもうすぐテスト近いし…」

「この世からテストなんて無くなればいいのに…」

冬音は、なんだかアンニユイみたいです。そんな冬音を私は、なだ宥める。

「まあまあ…。秋達、まだ教室にいるかな？」

「見て来れば？私は、もう動きたくない…」

「じゃあ見てくる。ちゃんと動けるように休んでてね？」

「はいはい」

顔を伏せて、冬音は手だけをあたしに振った。あれ？この場合、冬音の様になるのは、あたしなのでは…？

そんな事を考えながらあたしは、教室を出て秋達の教室を見る。

「えーと…あつ秋！」

「ん？春香か、どうした？」

「今日、勉強会なんでしょ？まさか忘れてたんじゃ…」

「忘れてたらこんな事しない」

そう言って手錠を付けられた夏騎を前に出した。

「ぱつと見たら、なんか問題起こした人だよ！可哀想だから止めてあげて！」

「…春香が言うなら…」

秋は、渋々承知してくれた。

解放されて夏騎は、一息ついている。

「ありがとう」

と言って夏騎は、あたしの手を握った。

「あついえ…」

つて…あたしは、なんでこれだけで赤くなってるんだ！純情な乙女か！いや、そうだけど…。



でも、秋以外にこうなるのは…。

そんな事を考えている間も夏騎は、ずっと手を握っている。

「季野くん…」

フラフラと覚束ない足取りで、冬音がやって来る。

「どうしたんだ？いつもの覇気がないな」

「うっせーよ、お前に用はない」

「不機嫌なので少しの口の悪さは、許してあげて……」

今にも喧嘩が始まりそうなので、そうなる前にあたしは秋に言った。

「秋じゃなくて夏騎に何か用なの？」

「お菓子を恵んでください」

「今日は持って来なかったの？」

冬音は、あたしを見て溜め息を吐いた。

「持ってきていたら頼まないでしょ？」

「そりゃそうだ」

あたしが頷くと、隣で秋がズボンのポケットを探っていた。

そしてポケットから飴を取り出すと、冬音の前に出す。

「夏騎は今日、何も持ってないんだ」

「チツ」

冬音は、あからさまな舌打ちをすると秋から飴を奪い取った。

本当に秋の事、嫌いなんだな…。でもちゃんと飴は、食べるんだよね…。

「ところで…そろそろ学校出ないと勉強会の時間なくなるんじゃないのか？」

「それはそれで良い！」

「お前だけやれや」

「じゃあ僕逃げるから」

「おいつ真ん中の奴！」

あたし達は、秋によって強制連行されました。冬音に至っては、飴を没収されて尚更不機嫌。

季野家の家は、一言で言うと…とにかくデカイ。広い庭まであり、執事にメイドまで…。

「お金持ち…？」

「部屋どい？」

冬音は、家そのものより二人の部屋が気になるらしい。あたしもどつちかって言うと部屋の方が気になる。

「俺と夏騎の部屋、二つあるんだがどつちにする？」

「お前の部屋、本とか参考書がごっそり置いてありそうだな…。正直言つてやる気が失せる」

「松永は、いつもやる気がないだろ…」

「じゃあ消去法で夏騎の部屋？」

そう言つてあたしは、夏騎を見た。続いて秋と冬音も夏騎を見る。

「別にいいよ」

夏騎は、部屋まであたし達を連れて行くとドアを開けた。大きな窓とベッドと机にテーブルと本棚と言うシンプルな物しか置いてない部屋だった。

「意外ー！もつとゴチャゴチャしてると思つてたのに…」

「春香に僕は、どう見えてるんだろうね？」

部屋を眺めていると、なんだかよく分からない箱が置いてあった。

「この箱は？」

「ああ、それは……」

夏騎が答える前に冬音が勢い良く箱の元へと走り、開けた。

「たっ宝箱……」

「宝箱!?!」

何か如何わしい物でも入っていたり……? そんな期待と不安を抱きながらあたしも箱を覗いて見た。

しかし想像していた物と全く違う物がその箱には入っていた。

「大量の……雨? あっ間違えた。大量の飴?」

「これは?」

冬音とあたしは、夏騎に視線を移す。まさか夏騎って甘党なの?

「松永さんが飴をよく食べてるから予備にいつも僕が持ってるんだよ。今日は忘れてしまったけど」

「神様」

「冬音は、飴持ってれば誰でも天使か神様だよな?」

秋は、椅子に座り教科書とノートを開き始めた。

「そろそろ勉強会を始めないか?」

「そっだね！冬音、教科書とノートは？」

あたし達、三人も椅子に座り教科書とノートを開く。

あたし 秋

テーブル

夏騎 冬音

と言う感じで座っているの、あたしはドキドキしっぱなしだし秋と冬音は睨みあってるし、夏騎は一人で問題解き始めちゃうので散々なのです。

「ここどうやって解くの？」

秋は、冬音を睨むのを一旦中止してあたしの教科書を覗き込む。あまりの至近距離に自分の心臓の音が聞こえてしまうのではと心配した。

それにしてもまつげ長い…サラサラの黒髪にキリっとした目元…。思わず眺めてしまう。

「ここはだ…ん？俺の顔に何かついてるか？」

「うっん！続けて？」

「…ああ…」

教科書に視線を戻して、また秋は話し始めた。あんまり見過ぎると不自然だよね…。

あたしは視線をなんとなく夏騎に移した。夏騎と目が合い、あたしは何故か顔を逸らした。

なんで顔を逸らすの？あたしは秋が好き……でも夏騎にドキドキしてる……。秋が好きだから顔の同じ夏騎にドキドキしてるの？それとも、夏騎が好きでドキドキして、顔の同じ秋にドキドキしてるの？

あたしが好きなのは……どっち？

！

後編へ続く

#### 第四話 勉強会と部屋と教科書と…（後編）

勉強会をしている間中あたしはずっと、どっちが好きなのか考えていた。

秋と夏騎には気づかれなかったけど冬音にバレて帰り道の公園で話をする事になった。

その公園が物凄く子供多いっ！さっさと帰らないと怒られるぞ。と思っていた矢先に親が向かえに来て子供が帰り、寒々とした雰囲気になった。

今の言葉撤回するから戻ってきてー！と思っても戻って来るはずがなく、ついに冬音が口を開いた。

「秋と夏騎君のどっちが好きなのか悩んでいるのか…」

早々に核心に触れてきた。凶星だった為、あたしは一瞬言葉を失った。

あたしが答える前に冬音が話を続ける。

「確かに外見同じだしね…双子だから当たり前なんだけど」

苦笑しながら冬音は言う。あたしは黙ってその話に耳を傾けていた。

冬音の言葉は、まさにその通りであたしは、まだ言葉が見つからない。

「外見は、同じだけど二人共違うでしょ。秋は嫌味で夏騎は神様で……」

「それは冬音だけの印象でしょう!」

「やっと喋った」

そう言っただ冬音は、笑った。冬音の正直な事だったのかもしれない……あたしに喋らせようと言った事なのかもしれない……それでも……。

それでも……冬音の言葉で少なからず救われた。

「本当だ」

あたしは、そう言っただ笑った。

「それで内面的にどっちが好きなの?」

「え?うーん……秋かな……」

「……この辺に中位の石があるよね?それに……今から行けば時間は大丈夫」

冬音は、言っただ石を探し始める。それをあたしが防ぐ。



「まさか投げるの!？」

「なんで嫌味眼鏡な訳？」

おおっ嫌味から嫌味眼鏡にグレードアップした…じゃなくて!

「あたしが夏騎って言えばそんな事しようとしなの?」

「私は……私は、冬音を大切にしない人なら誰も嫌だ」

「じゃあ…あたしを泣かせるような事があつたらどうするの?」

冬音は、目を逸らしてから背を向けて振り返らずあたしに言った。

「早く帰らないと怒られるよ?」

「うん……」

あたしは、頷いて冬音の後ろを歩いた。

冬音は、最後まであたしの問いに答えなかった。

次の日の朝、あたしはずーっと冬音を見つめていた。その事に気づいて冬音があたしの方を向く。

「何?どうかした?」

「うっん、なんでもない」

「昨日の事だけどさ…？私は、その時にならないと分からない。だからその時が来ないよう祈るよ」

「ありがとう」

そんな話をしているうちにちょうど先生が来て、あたし達は、それぞれの席に戻っていった。

続く！

#### 第四・五話 私と双子と親友と… side冬音

親友の春香は、普通より少しだけ可愛い。けれど本人に自覚は無く、周りの男子のアプローチにさえ気づかない鈍感だ。

そんな春香にも好きな人がいる。双子の秋と夏騎君だ。昨日の勉強会で分かった事だけど、春香は秋と夏騎君のどっちが好きなのか分からないで困惑している様子だった。

本人は、秋って悩んだ末に言ったけれど、また悩んだりするのだろう…春香の事だから。

多分、夏騎君が眼鏡を掛けて秋が眼鏡を外してただ隣に立っているだけでいたら、春香にはどっちがどっちだか分からないだろう。

けれど私は分かる。好きだからとかじゃなくて秋が嫌いすぎて眼鏡無しでもなんとなくあの嫌味オーラを感じるのだ。

私は、実を言うと恋をした事がなくて……。今そんな暴露した所で何の意味もないんだけど。

それとこれも意味のない暴露なのかもしれないが…。

私は、意図的に秋と夏騎君を季野くん（君）と呼んでいる。

まあ、秋は呼び捨てにして何の抵抗もないのだけれど…。

「松永さん、春香見なかった？」

「季野くん？春香なら季野君……秋と図書室だよ」

「また先を越されたか…ありがとう」

お礼を言っつて季野くんは、行こうとして足を止めた。そして振り返る。

「どうして松永さんは、僕と秋を苗字で？」

「別に理由はないけど？」

「訂正、どうして僕の事を苗字で？秋は秋なのに」

「特に理由なんてない」

「そっ…」

季野くんは、図書室の方へと歩いて行った。理由なんてない…訳ない…。

納得しやがって…と心の中で言っつてもどうにもならない。

確かに秋は秋だ。本人の前で呼び捨ては、ムカツクからしいけどさ？だから向こうも私の事を苗字で呼んでる訳だし。

でも夏騎君の場合は、秋と理由が違う…嫌味な訳でもムカツク訳でもない。

そう言えば夏騎君、秋と春香が図書館っつて言っつたら…また先を越されたか…と言っつていた。

そうか…夏騎君は、言葉にも態度にも表さず、ましてや声にも出していないが…春香に惹かれているのか…。

双子が揃って春香に惹かれるか…さすが双子？

秋は、態度に出していて夏騎君は、態度に出さないという違いがあるにしろ…根本的な事は変わらない…

春香に気があると言う事は…。

「松永、春香見なかったか？」

「お前と一緒にじゃなかったの？」

「そのお前って言うの止めるよ。さっきまで一緒に用事を別れた後に思い出して…」

「だから探してるのか…」

夏騎君が聞きに来たと思ったたら次は秋か…。今日の双子は、どこまでも似ている…。

「季野くんと一緒なんじゃないの？さっき探してたし…」

「俺も季野なんだが…。それにしても夏騎も探してたんだな」

「え…？ああ…」

なんで分かったんだろう…？苗字しか言っていないのに…。

「悪かったな。じゃあまた探しに行くとするか…」

そう言っただけは、春香を探しに行った。今日の春香は、よく探されるな…。

「あのー…秋君って好きな人いたりするんですか？」

「え？うん、いると思うよ」

「そうですか…」

頭を下げて、違うクラスの女子が俯きながら行ってしまった。

双子は、結構イケメンでモテる。少し前だと古いが下駄箱にラブレットが入っていたりとか…。

あまりにも肉食系な女子だと、私が対処して…その結果被害が私に及ぶ。つまり逆に対処した私が好かれてしまう。

だから私を好きだと言う女子が増える…それだけ双子がモテると言う事になる。

だから私としては迷惑な話だ。対処しないと秋が困る…それは良いのだけれど夏騎君が困るようになったら、また別だ。

薄々勘付いていたけれど…そうか…私は…

夏騎君が好きなのか…。

「冬音っ！ずっと探してたんだよ？」

そう言っつて春香は、私の手をとった。私は、苦笑しながら春香に言う。

「私、ずっとここにいたよ？」

「えっ嘘！」

「春香、ずっと探してたんだぞ」

「僕も」

春香がいる所に双子が集まる。私は、春香を見つめている夏騎君をチラッと見た。

ねえ、夏騎君……私はずっと……ここにいますよ？

続く



## 第五話 気づきとダイエットとヤキモチと…

テストが終わり、とりあえず一安心です。そんな訳で勉強会の時と同じポジションで食堂の席に座り、昼ご飯を食べているのですが…。

「もうちょっと量を減らしたらどうだ？太るぞ」

「太らない体質なんです！。それよりお前こそサンドイッチ三・四個って…」

「お前って言うの止める」

「じゃあ、もやしっ子」

秋と冬音の二人は、睨み合いながら口論をしている。昼ご飯をちゃんと食べながら…。

前は、秋が冬音を好きなんじゃないかと思ったけど…なんかこの雰囲気だと有り得ない…今更だけど。

「ほら、春香を見る！量が少なめだからこんなに細い！」

「春香が細いって…まるで私が太いみたいじゃない！」

「…フツ…太いだろ？」

「鼻で笑ったー！こいつ、鼻で笑ったよ！春香」

どうしよう…話題があたしにまで及んでいる…。とりあえず、何か

言おう！言ってから考えよう！

「ふ…冬音は、痩せてる方だよ」

「春香は、余裕だからそんな事言えるんですよ…八八八」

あれー？なんかネガティブな方向へ？もしや、さっきのは黙っているが正解だったのか！でも言わなかったら言わなかったで何か言われそう…。

「こうなったら私は、これから断食する！」

「それ、絶対死んじゃうよ！止めなよ！」

「止めるな！私の心が揺らいでしまう…」

「揺らせる為に言ってるんだよ。止めてよ」

案の定、冬音は、次の日の朝にフラフラになりながら学校へと来た。

「大丈夫？」

夏騎が冬音の傍に行き、そう声を掛けているのが聞こえた。あたし達と別のクラスなのに夏騎は、わざわざ冬音を心配して来てくれたらしい。

「大丈夫…心配してくれてありがとう…」

「そっか…じゃあまた後で見に来るから」

冬音に微笑みかけてから夏騎は、自分のクラスへと戻って行った。冬音は、ずっと夏騎の後姿を廊下に出てまで眺めていた。

これは、最近気づいた事だけれど、冬音は夏騎が好きなんじゃないかと思う。いや、絶対にそう！女の勘って奴かな？

《サイエンス部が幻覚水を発明しました。サイエンス部が幻覚水を持ってるので廊下を歩く方は、ご注意ください》

そんな校内放送が流れた後にあたしは、冬音が居ない事に気づいた。どこに行ったんだろう？そう思っていると廊下で誰かがぶつかる音と何かが割れる音が聞こえた。

嫌な予感がしながら、あたしは廊下に出て見て見る。

すると、そこには綺麗な桃色をした水……………を被っている冬音がいた。そして冬音と反対の方向にサイエンス部員がいた。

もしかして、さっきの放送で言ってた幻覚水を持ったサイエンス部と冬音がぶつかって、幻覚水を冬音が被ってしまっこの状態にいたるのでは？

なんかそれっぽい！あたし探偵の才能あるかも！

「一体どうしたんだ？」

「春香、大丈夫？」

秋と夏騎も騒ぎに気づいて廊下へ出てきた。今頃ですが、この学校

の廊下は広いです。大きな窓も廊下の端に付いています。高所恐怖症の人には、辛い位置にある窓です。

「あたしは、大丈夫だけど冬音がさっきの放送の水を……」

「飲んだのか？まさかそこまでバカだとは……」

「違うよ。さすがに冬音は、そこまでバカではないよ」

あたしは、とりあえず冬音を抱き起こした。そして呆然と座っている部員を見た。

「幻覚水って被ると、どうなるの？」

「さあ？香水を付ける位の量しか想定してなかったのよ」

「能無しが…冬音がこんな状態なのに！」

「春香、落ち着いて」

そう夏騎に言われて、あたしはもう一度聞き直した。

「その香水付ける位の量だと、どうなの？」

「自分の今、望んでいるものが見えます。この人が被った量だと…  
小一時間もすれば戻りますよ？」

冬音が今、望んでいるのは食べ物…かな。それが夏騎か…。あたしも少し欲しい…。

「それにしても綺麗な桃色だね？」

「男性でも使いやすいようにと思って…」

「逆に使いにくいと思うよ…桃色だよ？ピンクだよ？」

冬音は、保健室に寝かせて置き、放課後になってから様子を見に行く事になった。

「あれ？松永さんは？いつも帰り一緒だよね？」

他のクラスの女子が教室を見回しながらあたしに言って来た。

「えっ？うん、そうだけど貴方は？」

「ああ、私の名前は本井桜ほんいさくら！季野君達と同じクラスだよ。よろしく」

「よろしく。あたし、これから保健室に行くの」

あたしがそう言うと本井さんは、驚いた顔をして聞いてきた。

「具合悪いの？」

「そうじゃなくて…ほら校内放送で言ってた水が冬音にかかったやつて…だからこれから様子を見に行く所なの」

「そうなんだ…私も様子見に行っていていい？松永さんとは前から話してみたかったの」

「いいよ」

あたしと本井さんは、話をしながら保健室へと向かった。でも、これから本井さんの意外な関係を知る事になるなんて思いもしなかった…。

保健室のドアをノックしてから開けると先生は、何かの用事でいらいらしかった。

代わりに秋と夏騎がいた。冬音は……布団に包まっている。

「遅かったな」

「うん。そうだ！あたしの他にさっき知り合った子が来てて…」

本井さんの姿を見た途端、秋の表情が強張った。あたしが首を傾げている間に本井さんが話し始める。

「こうしてちゃんと話すのなんて…久しぶりだね？」

「…そうだな」

「あの…えっと…知り合い？」

「私と秋は、前に付き合ってたの」

この言葉を聞いた瞬間、あたしの頭の中でこの言葉が繰り返された。

「付き合ってたって…？」

「その言葉通りの事。もう別れたけど、私はまだ未練がある」

本井さんは、そう言って秋の腕に自分の腕を絡ませた。

「離し…「離しなよ」

さっきまで布団に包まっていた冬音が立って本井さんの腕を掴んだ。

「なんで？」

「人の恋心分かっててそう言う事するのは…私は好きじゃない。からかいたい気持ちは分かるけど」

「…っ！そうだね…」

なんか冬音、かっこいいけど…あたしをからかいたい気持ち分かってちゃうんだ…。それさえなければ良い感じなんだけど…。

「ねえ？夏騎君…私と付き合わない？」

それを聞いて、さっきまで余裕だった冬音が慌て始める。あたしは、冬音の代わりに本井さんに聞いてみた。

「どうして夏騎なの？」

「だって秋は、ダメでも夏騎君なら良いんじゃない？ね？」

「季野くんにするならこいつをあげるよ」

冬音が秋を本井さんの前に出す。

「ダメ。友人とどっちが大事？」だいじ

「……………チツ」

「松永…お前恐ろしい奴だな」

冬音に解放された秋は、冬音と間合いを取っている。

「どっ？夏騎くん」

「じゃあ…いいよ」

そう夏騎が答えた後、二人は保健室を出て行った。

「……………冬音、大丈夫……………冬音？」

今の返事のショックで冬音が倒れたと思い、近づいてみると…ただ眠ってしまっただけだった。

「良いタイミングで眠ったね…」

あたしは、眠っている冬音にそう言ってから溜息を吐いた。

続く…！



## 第六話 恋と本屋と帰宅と…

夏騎が本井さんと付き合おうと言った翌日の昼休み、あたし達の教室に来て夏騎が言った一言があたしと冬音と秋を唾然とさせた。

「今…なんて？」

「だから、本井さんと付き合っのを止めた」

「なんで急に？だって昨日は…」

「見破られちゃったからね」

夏騎のその言葉にあたしは、首を傾げた。秋は、何も言わずに夏騎を見つめているだけだった。

今日は、とても不自然で…夏騎の「付き合っのを止めた」発言に質問をしているのは、あたしだけだった。冬音と秋もいるのだけれど、一言も話さない。

「季野くん…ちょっといい？」

一言も話さなかった冬音が夏騎にそう言った。夏騎は、頷いて冬音について行き、教室を出た。

あたしと秋は、暫く二人の出で行った方を見ていた。

「じゃあ俺は、教室に戻る。夏騎も、どうせ話が済めば来るだろ」

「うん、それじゃあまた放課後にね」

「ああ」

秋は、あたしに向かって小さく手を振ってから教室を出て行った。昼休みが終わるまで、まだ少し時間があるので寝ようと机にうつ伏せようとしたり、教室のドアの近くで白衣を着た女子生徒が教室を見回していた。

あたしは、立ち上がって女子生徒の近くに行く。白衣って事は、サイエンス部かな？サイエンス部しかないよね…。

「どうしたの？誰かに用事？」

「あっ！覚えてませんか？昨日、廊下で…」

彼女に言われて、あたしは、昨日の事を思い出した。そして冬音とぶつかったのがこの子だ。

「そつだ！冬音にぶつかったサイエンス部の…。あたしに用事なの？」

「はい、この間ぶつかった方にお詫びをしたかったので」

「そうなの？でも生憎冬音は、どこかに行っちゃってるの」

「そつだったんですか…それでは、また後で来て見ます」

彼女が立ち去ろうとしたのをあたしは、引き止めた。

「ちょっと待って！名前は？」

「冠かんなぎもみじ風紅葉です」

冠風さんは、頭を下げると足早に自分の教室へと入って行った。今更だけど、あたしのクラスは一組で秋達のクラスが三組。そして冠風さんのクラスが四組らしい。

同じ年なのに何故敬語？

あたしが席に戻ったのと同時に冬音が戻って来た。

「話、終わったの？」

「うん、春香ってさ…幸せ者だよね？」

「え？」

「あつ！チャイム鳴る時間まで、まだ余裕ある」

しっかりと聞き取れた…あたしって幸せ者なの？そう聞こうとして、冬音に話を逸らされる。

もう聞こえちゃってるけど冬音は、何故？とあたしに言わせてくれない。

「そついえば四組の冠風さんがお詫びしたいとかで教室に来てたよ？本当についさっきの事なんだけど…」

「え？そうなんだ…時間あるし、ちょっと行ってくるね？」

「うん」

戻って来たばかりなのに冬音は、また教室を出て行ってしまった。  
今日の冬音は、大変だなー。

そっだ…夏騎と何話してたか聞きそびれた…。

そんなこんなで冬音が話を終えて戻って来たのは、チャイムの鳴る  
ギリギリの時間だった。

放課後になり、あたしは早速冬音に聞く事にした。

「夏騎と何を話してたの？」

「話と言つか…何と言つか…」

あたしの問いに冬音は、言葉を濁すだけだったけれど、このままで  
はダメだと思ったのか濁すのを止めた。

「……何を話したかは、季野さんに口止めされてて言えないから無  
理」

「口止め料として飴玉もらってるんだね？」

「私が喋らないとすればそれしかないでしょ」

ポケットから飴玉の入った袋をあたしに見せて冬音は、そう言った。

「でもそこまでして他の人に知られたくない話をしてたんだね？」

「知られたくないと言うか…言ったら春香が混乱する事になるから」

「あたしが混乱する？」

また、聞こうとした所で邪魔が入ってしまった。秋と夏騎が教室に鞆を持ってやって来たからだ。

「何か話してみたいんだけど、もういいの？」

「うん、大丈夫」

さすがに本人の前で聞けないのであたしは、ついそう言ってしまった。これで今日は夏騎と何を話してたか聞けないよ…。

「じゃあ帰るか」

秋がそう言った後に冬音が手を挙げた。

「ちょっと私、用事があるんだけど」

「何か買うのか？」

「本、今日が発売日だから」

「奇遇だな、俺も本屋に用事がある」

「季野君と同じなんて嫌な奇遇だな」

あからさまに嫌な顔をしながら冬音が言った。今にも喧嘩が起ころうともおかしくない雰囲気。

冬音達の言っている本屋は、学校を出て左に三分あるいた所（かなり近い場所）にある。しかし、そうなると一つ問題が残る。

「冬音は、ともかくあたし達の家は、学校を出て右だよな？」

「俺達は、本屋に寄ってから帰るけど、春香達は、どうするんだ？」

「俺達って…一緒にしないでよ！」

「いや、一緒だろ」

口論している二人に対して、あたしは出来るだけ声を大きくした。

「えーと、あたしは真っ直ぐ帰るかな…あんまり遅いと親が心配するし」

「僕も春香と同じ」

「そうか」

一旦、口論を止めて秋が頷きながらそう言った。

本当は、秋ともう少し一緒に居たい…でもそう言ったら、あたしが秋を好きな事がバレてしまうかもしれない。間接的な告白っぽい言葉は、なるべく避けなければ…。

どうせ告白するなら「好き」って気づかれない内にハッキリ言いたい。そう思いながら、あたしは、鞆を持った。

学校を出て、あたし達は右に、秋達は左に曲がった。ふと、振り返ると冬音が手を大きく振っていた。

あたしは、少し恥ずかしくて冬音に小さく手を振った。

「それにしても…秋と冬音、喧嘩してないかな？」

「してると思うよ」

「ええっ！」

夏騎にそう言われて心配になったあたしは、つい後ろを振り返ってしまう。

「心配しなくても大丈夫だよ。あれは、照れ隠しだから」

「照れ隠し…？」

秋が一体、何に照れているのだろうか？あたしが聞く前に夏騎は、言った。

「秋、松永さんが気になってるみたいだから」

「え…？」

あたしは、一瞬フリーズした。その言葉が理解できなかった…違う…理解したくなかったんだ…。

「冬音に気があって…喧嘩になるような事をワザと？」

「まるで小学生みたいだろ？」

「うん」

それより…あたしが秋を好きで秋が冬音を好きで冬音が夏騎を好きで…。まさに三角関係じゃない！

あたしは、家に帰るまでずっとそんな事を考えていた。

続くよ！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6343x/>

---

無限問題

2011年10月26日02時06分発行